

特 高等学校
集
No.3

グローバル人間力の育成
のために
～多文化共生を実現する教育の取組～



県立国際高等学校
教頭 瀬尾 幸司

1 はじめに

本校は県立で唯一の国際科の専門高校として開校し、本年度創立11年目を迎えた。開校以来、教育目標として「国際社会に貢献できる人材の育成」、「自ら発信し、多文化・多言語も受容できる人間の育成」の2つを掲げ、急速なグローバル化の進展の中で、地球市民としての自覚を持ち、21世紀の世界における様々な課題を広い視野でとらえ、その課題解決をととして国際社会に貢献できる人材の育成を目指している。さらに、自国の歴史や伝統文化の理解の上に立って、自らのアイデンティティを確立し、様々な国の人々と積極的に相互理解を図ることができるコミュニケーション能力を養い、これからの国際社会で活躍できる生徒の育成に取り組んでいる。

2 本校の現状

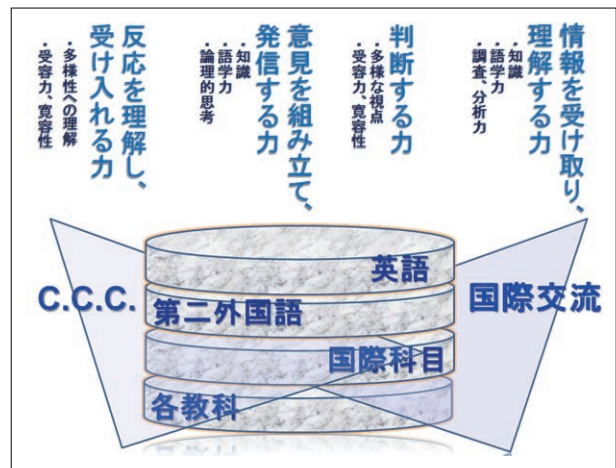
本校の在籍生徒全364人中の現在の帰国生（受検時に帰国生の資格で出願し、合格した者及び海外からの帰国による編入生）と外国籍・多国籍生徒の在籍状況は以下のとおりである。

	3年次	2年次	1年次
帰国生	4	3	3
外国籍・多国籍	4	10	5
計	8	13	8

3 本校の教育プログラム

本校では、上に述べた教育目標を達成する

ため、この10年で日々の授業や学校行事等を有機的に結びつけた包括的、重層的な実践的教育プログラムの開発に取り組み、安定して実施できる形になっていると自負しており、多文化共生に係る取組も学校全体の取組をととして実施している。そのプログラムのイメージは、下図のとおりである。



4 各取組について

各教科・科目の授業を土台にしながら、学校全体の教育活動をととして、国際教育、多文化共生を実現する教育に取り組むのが本校のスタイルである。上のイメージ図に沿って、各取組について述べる。

(1) 各教科・科目

各教科の取り扱う内容により、例えば英語科において少数民族の文化やアイデンティティについて学んだり、学校設定科目の「食の文化」において食をととしての異文化理解に取り組んだりする等である。

また、本校では、全生徒が学校設定教科「国際」の科目「外国研究」を履修する。ドイツ、フランス、イタリア、スペイン、中国、韓国・朝鮮から1つを選び学習する。言語はもちろん、その言語が話されている国の文化や社会情勢も学ぶ。

(2) C.C.C.と海外研修

本校では、総合的な学習の時間をC.C.C.と呼び、本校の教育目標達成のための大きな柱に位置付けている。C.C.C.とは、

Communication (コミュニケーション)
Cultural Understanding (異文化理解)
Contribution (貢献)

の頭文字をとったものである。本校では、2年次に全生徒が5泊7日の海外研修を経験する。この海外研修に向けて取り組むものである。1年次では、国際社会に貢献できる人材となるために、提案型のプロジェクトに取り組むことで、生徒は「社会に貢献することとはどういうことか」を学ぶ。実際に地域等に出かけ、関係者等と話をしながら、「本校生が地域のためにお役に立つこと」を企画し、実現に向けて取り組む。その企画の立案、実行の過程で、生徒同士で話し合ったり、地域の方々と話し合ったりすることをおして、異なる価値観やものの見方とぶつかり、どうやって共通理解を生み、より良い解決策を生み出すかに悩む。その過程も生徒の多文化共生の心を育てる刺激となる。そして1年次の終わりから、「コミュニケーション」、「異文化理解」に重心を移し取り組んでいく。

海外研修は、ホームステイを中心に、訪問



▲ 海外研修のひとコマ (アメリカ)

先の交流校の授業に参加するなど、観光よりも海外での体験に重点を置いたものである。本年度はアメリカ、カナダ、イギリスの3か国に分かれて実施する。3か国とも移民を多く受け入れている国であり、そのような国の学校で生活すること、家庭に入って生活を実体験することそのものが、多文化共生を肌で感じ、異文化を受容する態度の育成につながる。また交流の中で、日本や兵庫県について紹介する活動も取り入れている。生徒が自分たちの住む地域社会についての理解を深めるとともに、自らの文化について伝え、相手に理解してもらうことの大切さや難しさを実感することにつながっている。

海外研修に向けて、生徒は訪問国ごとに「発見ブック」という独自のガイドブックを作るが、その過程で、それぞれの国の文化や社会情勢についても学ぶことになる。

(3) 国際交流セミナー

海外研修に向けてのトレーニングとして夏季休業の最初の2日間を「国際交流セミナー」として、初日に1年次生、2日目に2年次生が英語漬けの1日を過ごすことにしている。毎年、県下のALT約25人を招聘し、ALT1人に生徒4~5人がグループとなって英語を使った様々な言語活動を行っている。その中で、ALTに自分の出身国についてのプレゼンテーションをしてもらい、生徒が質疑を行うというワークショップがある。今年度はALTの出身国のバリエーションは6か国であった。ALTをとおして、多様な異文化に触れる機会にもなっている。また、海外研修の



▲ 国際交流セミナーのひとコマ

予行演習として、ALTが日本文化について生徒に質問し、生徒がそれに答えるというワークショップも取り入れている。

(4) 国際交流行事

本校は、ドイツ・フンボルト校と姉妹提携をしており、隔年で相互に訪問を行っており、2年に一度研修団が来校する。また、海外研修の交流校であるイギリスのベリー・セントエドモンズ・カウンティ・アッパースクールは毎年、カナダのパシフィック・クリスチャン・スクールは4年に一度来校する。日仏高等学校ネットワーク「コリブリ」^{注)}によりフランスの高校との交流も行っており、毎年2～3名の生徒が3週間来校する。その他、県教育委員会の中国との交流事業や、国の韓国との交流事業で生徒を派遣した場合は、相手国からの高校生受入を行っている。その他、芦屋市国際交流協会関係の海外高校生の一日訪問、YMCAやJICAの関係など、年間をとおして海外の高校生等が来校する機会がある。そういった機会も本校生が異文化に触れ、多文化共生を学ぶ良い経験となっている。

(5) 多文化ワークショップ

毎年、英語圏以外の外国人留学生や研究者と交流し、歴史や文化について学ぶ多文化ワークショップを行っている。平成24年度は神戸大学等から21名の留学生を招いた。留学生の出身国の中にはミャンマー、ベルギー、ルーマニア、アゼルバイジャンなど、普段なかなか接することのできない国も含まれており、英語圏の文化を学ぶことに偏りがちな生徒の視野を広げることにつながっている。



▲ 多文化ワークショップのひとコマ

(6) 人権講演会

人権講演会において、多文化理解に係る講演を実施している。平成24年度は、「インドネシアと日本」をテーマとした。日本とインドネシアの経済連携協議に基づき看護師候補としてインドネシアから来日され、看護師資格を取得して姫路赤十字病院看護部で勤務されているスワルティ看護師に来校していただいた。約1時間、生徒がインタビューする形でお話を伺った。



▲ スワルティ看護師の講演会

事前学習でインドネシアと日本の教育や医療制度の違いなどについても学んだ。インドネシアと異なる文化の中で、看護師として命にかかわる仕事をする事のむずかしさや、日本とインドネシアの共通点などもお話しいただいた。

5 おわりに

昨年度、開校10周年記念行事を終え、新たな次の10年に向け、今年度から「GLOBAL人間力の県立国際」をキャッチフレーズに、本校のこれまで行ってきた教育活動を再整理している。「GLOBAL人間力」育成につながる実践はできないかと常に模索しつつ、「GLOBAL人間力」を支える要素の「多文化共生の心」をしっかりと根付かせる教育活動を学校全体のプログラムとして整備していくところである。

